

# 新約ギリシア語中級文法試(私)論(二)

——動詞の時制とアスペクト(一)——<sup>①</sup>

伊 藤 明 生

## 序

本来ならば、本稿でポーター、ファニング、マツケイ<sup>②</sup>といった最近の動詞アスペクトの研究を概観し、分析・評価した上で、筆者(独自?)の議論を展開すべきところであろう。筆者自身の能力も含めて諸般の事情で、今回は困難と思われるので、そのような本格的なアスペクトとの取り組みは次の機会に譲りたいと思う。そういう訳で、本稿の目的は非常に平凡で、謙虚なものである。動詞の時制を、従来のアクティオンザルトではなく、アスペクトと理解するのが本当に妥当なのかどうか、一体何が変わってくるのか、という基本的な問題に焦点を当て、二三の例を新約聖書本文より探ってみたい<sup>③</sup>。

最初に、文法の基本的性質という基本的な事柄に触れておきたい。私たちは、往々にして文法というものを経験を法律のようなものと考えがちである。文法を言わば法律のように考える考え方を、規範文法と呼ぶが、外国語の初級文法では普通、この発想が強い。つまり、ある外国語では、このような規則があり、このような

規則を遵守しないといけない、と。しかし、初級を過ぎ、中級以降になれば、母国語として使う人々は、このような概念をどのように表現するか、どのように表現する方がネイティブ・スピーカーに自然に響くか、といったことを考えたり、実際に母国語を使用する人々の用法にあたって調べたりする必要が生じる。このような方法論を、帰納法と呼び、帰納的に導き出す文法のことを、規範文法に対して叙述文法などと呼ぶ。これは、明らかに文法というものが、数学や物理の法則とは根本的に異なることを示している。数学や物理では、普通は演繹法という手段が用いられる。文法が対象とするものは、あくまで人間が使用する自然言語であって、実際に使用されている言語のうちに規則を見い出して文法を組み立てていく。初めに文法があつて、人間がその文法に従つて言語を話すのではなく、先に言語があつて、その言語に規則（文法）を見い出していくのである。従つて、外国語を学ぶ時、初級文法の段階では、沢山の規則（文法）を学ぶが、初級から中級へと行くに従い、次第に既に学んだ規則の例外、あるいは「不規則な規則」を学ばなければならなくなる。しかも、なぜかよく使われるもの程、不規則になる嫌いがある。法律ならば、あくまでも法律が有効な期間は（勿論、法律には変更が可能である）法律を規準にして、例えば人の行動が計られるが、言語の場合には、大多数の人が「間違えてしまえば」、その間違いの方が正しい文法になってしまう。正に「赤信号、皆で渡れば、こわくない。」の世界である。法律的に考えれば、いくら皆が渡つても、赤信号で渡つてはならない、と法律にあれば、それは法律違反に他ならない。<sup>④</sup>しかし、文法の世界では、皆が間違えれば、本来の規則通りの方が間違いになりかねない。

また、外国語の文法を考える時、しばしば母国語の文法カテゴリーに無理矢理にはめ込もうとしがちである。ただ、日本の学校教育を受けた者達の場合は、あるいは、母国語の文法ではなく、中学校以降に学ぶ英語の文法のカテゴリーの影響の方が強いかもしれない。<sup>⑤</sup>それはともかく、ある言語を帰納法的に研究し、叙

述文法を確立するのは、ここで口にしてきた程、容易なことではない。母国語の叙述文法であれば、母国語を客観的に観察するのは、非常に難しいし、外国語の場合には、母国語の文法を読み込まずにその言語を研究するのは非常に難しい。⑥もう少し具体的に言えば、古代のギリシヤ語について言えば、歴史的に言つてラテン語文法に大いに影響を受けてしまった。つまり、古代のギリシヤ語を研究した人々は、当然のこととしてラテン語に堪能であり、ギリシヤ語の文法を作り挙げていく段階で、ラテン語の文法をギリシヤ語の文法に読み込んでいつてしまった。その後は、近代欧州の言語の文法を古代のギリシヤ語の文法に見てしまう危険は常にあった。

前置きが長くなつてしまつたが、言語の文法というものを考える上で基本的なことは多少なりとも、心に留めておきたい。とりわけ、新約聖書のギリシヤ語の時制を考える上では、この基本的な事柄は非常に重要である。と言うのは、古典ラテン語を始め、ヨーロッパの言語では、ほとんどすべて、過去・現在・未来という時間概念が動詞の時制の中心を占めているが、古典ギリシヤ語は、そうではなく、アスペクトが中心ということが暫く前から学者の間では認められてきた。従つて、新約聖書のギリシヤ語は、古典ギリシヤ語と同じくアスペクトが時制の中心的概念であるのか、それともその他のほとんどすべてのヨーロッパの言語のように時間概念であるのか、具体的に新約聖書の本文に当たつて帰納法的に探つていきたい。これが、本稿の課題に他ならない。

具体的には、先ずアスペクトの定義をもう一度確認してから、個々の用例を見ていきたいと思ふ。しかも、具体的に見ていく用例も基本的な事例、例えば、新約聖書には「時制の一致」がないとか、イエスの十字架を表現する動詞が様々な時制形で用いられているとか、に本稿では限ることにする。

## 一、動詞アスペクトの定義

既に前回の拙稿で、ポーターとファニングのアスペクト定義は紹介したが、以下にもう一度記して置く。

ポーターの定義は、「動詞アスペクトを定義すると、話し手なり書き手なりが、動詞体系の中の特定の時制形を選んで、行動の見方を文法化する(即ち、語形を選んで意味を表現する)意味論上のカテゴリーとなる」<sup>⑨</sup>

また、ファニングの定義は、「新約ギリシャ語の動詞アスペクトとは、動詞が描写する行動や状態に関する話し手の焦点あるいは視点を反映させる動詞の文法上のカテゴリーである。実際あるいは理解されている状況の性質自体とは別の、出来事の描写あるいは、出来事を見る視点を示すものである」<sup>⑩</sup>

更にポーターの原著の定義をも引用しておく。「ギリシャ語の動詞アスペクトとは、著者は過程を概念的に捉える際の主観的で論理的な選択を文法化(文法的に表現)するが、そのための、時制体系の網状組織(ネットワーク)での意味ある反対に用いられる、総合的意味論上のカテゴリー(動詞の語形に実現される)である」<sup>⑪</sup>

更にマツケイの定義も紹介して置く。「古代ギリシャ語のアスペクトとは、著者(または話者)が言及する各々の出来事とか活動を、その文化脈との関係で、どのように見ているかを示す動詞体系のカテゴリーのことである」<sup>⑫</sup>

最後に、言語学者の定義も紹介して置く。「アスペクトの一般的定義として私たちは、次のような公式化を採用することができる。「アスペクトとは、状況の、内的時間の構成要素を見る異なる方法のことである」<sup>⑬</sup>」

以上から、明らかかなことは、アスペクトという場合、とりわけ従来のアクティオンザルトと比べて大きな特徴・相違は、出来事なり行動の仕方ではなく、話者なり著者なりが出来事なり行動を、どのように見るかに焦点が移っていることであろう。従って、同じ出来事なり行動なりが新約聖書でどのように表現されてい

るかを見れば、基本的には動詞アスペクトが正しいか否かがわかることになる。具体例に当たっていきいたいと思うが、その前に新約ギリシャ語の動詞の時制形と過去・現在・未来という時間との関係を先ず見ておきたい。

## 二、時制形と時間について

先ず、ここで指摘しておきたいことは、新約聖書の（及び古典）ギリシャ語には「時制の一致」がないことである。「時制の一致」とは、英語の文法で説明するならば、例えば話法の枠組みになる時制が過去の場合に間接話法では、話しの内容の時制が直接話法の時制の前に遡ることを言う。例外的に、普遍的な事実などの場合には、「時制の一致」は起こらない。具体例を挙げてみれば、次のようになる。

直接話法では、*He said, "I am going home."* という文が、間接話法では、*He said that he was going home.* となる。

つまり、直接話法で「am going」とい現在進行形が「was going」と過去進行形になっている。ところが、ギリシャ語では、このような現象が通常起こらない<sup>14)</sup>。例えば、マタイによる福音書二〇章一〇節には、*οἱ πρῶτοι ἐνόησαν ὅτι πάλιν ἀπευθύνται* とあるが、直接話法に直せば、*οἱ πρῶτοι ἐνόησαν, "πάλιν ἀπευθύνεται"* である。英語に訳せば、前者（間接話法）は *The first ones thought that they would receive more.* で、後者（直接話法）では、*The first ones thought, "We shall receive more."* となる。つまり、直接話法と間接話法とを比べると、ギリシャ語でも英語同様の人称の相違が生じるが、ギリシャ語の場合には、時制と法は直接話法と間接話法とでは相違がないことがわかる。他にも例を挙げてみると、以下のようになる。

ヨハネによる福音書一一章一三節：*εἶπκεν δὲ ὁ Ἰησοῦς περὶ τοῦ θανάτου αὐτοῦ, ἐκεῖνοι δὲ ἔδοξεσαν ὅτι*

περὶ τῆς κοιμῆσεως τοῦ Ἰησοῦ λέγει.

Now Jesus had spoken of his death, but they thought that he *was speaking* about waking from sleep.

Ἐν τῷ ἐκείνῳ 福音書九章一八節：Οὐκ ἐπίστευσαν οὖν οἱ Ἰουδαῖοι περὶ αὐτοῦ ὅτι ἦν τυφλὸς καὶ ἀνέβλεψεν ἕως ὅτου ἐφώνησαν τοὺς γονεῖς αὐτοῦ τοῦ ἀναβλέψαιτος

Now the Jews did not believe that he *had been* blind and *had begun* to see until they called the parents of the one who *had begun* to see.

Ἐν τῷ ἐκείνῳ 福音書六章一二節：Τῆ ἑπαύριον ὁ ὄχλος ὁ ἑστηκὸς πέριπαυ τῆς θαλάσσης εἶδον ὅτι παλιόριον ἀλλὰ οὐκ ἦν ἐκεῖ εἰ μὴ ἔν ἐν καὶ ὅτι οὐ συνεισηθηθεν τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ ὁ Ἰησοῦς εἰς τὸ παλιόν ἀλλὰ μόνου οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ ἀπηλλάθον.

On the next day the crowd who remained on the other side of the sea saw that there *had been* no other boat there except one, and that Jesus *had not entered* the boat with his disciples, but that his disciples *had gone away* alone.

使徒の働か 三章一七節：Τὸν ἀΐδουα τοῦτον συλλαμηθέντα ἰπὸ τῶν Ἰουδαίων καὶ μέλλοντα ἀναπεῖσθαι ἰπὶ αὐτῶν ἐπιστάς σὺν τῷ στρατεμάτι ἐξελάμην μαθῶν ὅτι Ρωμαῖός ἐστιν.<sup>15</sup>

This man was seized by the Jews, and was about to be killed by them, when I came upon them with the soldiers and rescued him, having learned that he *was* a Roman citizen.

このように、「時制の一致」が起るからというわけとは一体どういふわけであらうか。「時制の一致」という現象は、一言で言えば、間接話法全体の時間的視点あるいは座標軸が固定化されていることを意味すると思われる。過去の話し（つまり「話す」という動詞が過去時制の場合に）の内容は、一段階過去になる（過去時制は過去完了時制に、現在時制は過去時制に、未来時制は過去未来時制になる<sup>16</sup>）。ところが、「時制の一

「一致」がないということは、間接話法全体の時間的視点または座標軸と、話しの内容の時間的視点または座標軸とは別々に存在することと思われる。話しの内容の座標軸は、あくまで話している時点の座標となる。つまり「時制の一致」という現象の背後には、動詞の時制を比較的絶対的に捉える視点があり、反対に「時制の一致」が起こらない背景には動詞の時制を比較的相対的に捉える傾向が認められるのではないだろうか。もし、このような解釈が正しいとするならば、ヨーロッパの近代言語と比べると、新約聖書のギリシャ語には絶対的な時間の座標軸が薄い、もしくは相対的な時間座標軸が強いと結論できるのではないだろうか。勿論、ここで拾ってきたサンプルの数は少しく、「時制の一致」という現象についても詳細に、しかも緻密に考察するべきであるが、少なくとも暫定的に、そう結論付けられる、と思う。

### 三、アクティオンザルトかアスペクトか

ここで、本稿の中心的課題である、新約聖書のギリシャ語の動詞の時制がアクティオンザルトであるのか、それともアスペクトであるのかを見てみたい。そして、ここでのアプローチの仕方は、先に既に触れたように同じ出来事が様々な時制で表現されていることに注目してみたい。ただ繁雑さを避けるために法による区別、とりわけ直説法と非直説法との区別は特にしなかったが、具体例としては、できるだけ直説法の用例を挙げることにする。まず、イエスの復活への言及を見ると、以下のような言及が見い出せる。

イエスの復活への言及では、通常 *ἐπέβη* か *ἀνέβη* という動詞が用いられる<sup>17)</sup>。動詞 *ἐπέβη* は新約聖書全体で一四四回使用されているが、そのうち四九回イエスの復活に関して用いられている。その四九回中で、三六回はアオリスト時制<sup>18)</sup>、九回は完了時制<sup>19)</sup>、三回は未来時制<sup>20)</sup>、一回は現在時制<sup>21)</sup>で使用されている。これだけの統計から何かを結論付けるのは、危険ではあるが、基本的にギリシャ語の時制が客観的な出来事の起





在時制の命令法が用いられている。

いずれにしても、新約聖書のギリシャ語の動詞の時制は出来事の起こり方というような「客観的」視点が反映していると言うよりも、むしろ著者の視点という、より「主観的」視点が中心を占めていることは大雑把に言うことができると思う。詳細は次の機会に譲りたいが、以上見たことだけからでも、完了時制は出来事そのものの描写というよりも、過去の出来事が著者や読者の「今」にどのような意義があるか、どのように関わってくるかに焦点が合う時に用いられる傾向があると言える。しかし、厳密なことは、更に直説法、非直説法、分詞など区別して論じる必要が当然ある。

### 結論

以上の簡潔な議論だけから、結論らしきことを言うのは、ほとんど不可能である。しかし、充分に一つの方向性は出てきた、と言っていいであろう。ただ、勿論アスペクト理論がどこまで新約聖書のギリシャ語全体で通用するのか、またポーターとファニングとの議論<sup>②</sup>に見られるように著者／話者の視点と出来事／行動の起こり方との関係または関連などについて更に議論を詳細に詰めていく必要がある。次の機会に以上のような大仕事は委ねたい、と思う。

### 注

① ファニング（索引込みで四七一頁）とポーター（索引込みで五八二頁）の大著より想像できるように、本来ならば、大部の論文を書かねばならないが、諸般の事情で、このように薄っぺらなものになってしまった。ただ、本稿の読者にも赦していただけそうな理由が一つだけある。それは、急にポーターの「イデー

オムズ」を翻訳することになり、筆者は時間と労力をかなり費やしている現状である。

- ② S. E. Porter, *Verbal Aspect in the Greek of the New Testament, with special reference to tense and mood* (New York/Bern/Frankfurt am Main: Peter Lang, 1989); B. M. Fanning, *Verbal Aspect in New Testament Greek* (Oxford: Oxford University Press, 1990); K. L. McKay, *A New Syntax of the Verb in New Testament Greek* (New York/Bern/Frankfurt am Main: Peter Lang, 1994).

③ 前回の『基督神学』掲載の拙稿に対する反応の主たるものは、ポーターのアスペクト論に関心が集中していた。

④ ところが法律の場合にも、解釈という手段を用いて、時代遅れの法律を時代の変化に順応させることもあるので、話は、これほど簡単ではないであろう。

⑤ 恥じを忍んで言ってしまうば、少なくとも筆者にとっては、日本語の文法よりも、中学以降、学校で学んだ（それが正しいか否かは別として）英文法の方に親しみを覚え、体に染み着いている気がする。

⑥ マッケイ曰く、「外国語の研究での主要な落とし穴の一つは、その枠組みを自分自身の言語のそれと同化させてしまう傾向である。…… (One of the main pitfalls in the study of a foreign language is the tendency to assimilate its framework to that of one's own language. …….)」(p. xi) そして、例としてギリシャ語の完了時制とアオリスト時制との混同は、英語など他の言語への翻訳に注意を向け過ぎてしまっって、文脈とかギリシャ語使用者に許されていた選択肢などを疎かにした結果であると指摘している。

⑦ 筆者は、この表現を古典ギリシャ語とは区別して使用している。古典ギリシャ語は、ギリシャの古典期、つまりヘレニズム時代以前のものを指すが、古代のギリシャ語と言う時は、古典ギリシャ語およびヘレニズム時代の、コイネーのギリシャ語をも含むことになる。

- ⑧ ヨーロッパ中世の（ルネッサンスの初期までは）学者の公用語はラテン語であったし、近世以降も、古代のギリシヤ語の文献を研究する者たちは最低限のラテン語を知っていることは学者としての常識であった。
- ⑨ 『基督神学』 No 七、七頁。ポーター『イディオムズ』二〇～二二頁より。
- ⑩ 『基督神学』 No 七、一四頁～一五頁注二〇。ファンングの原著八四～八五頁より。
- ⑪ Porter, *Verbal Aspect* p. 88. Greek verbal aspect is a synthetic semantic category (realized in the forms of verbs) used of meaningful oppositions in a network of tense systems to grammaticalize the author's reasoned subjective choice of conception of process.'
- ⑫ McKay, *A New Syntax* p. 27.
- ⑬ B. Comrie, *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976) p. 3.
- ⑭ 例えば、古典的な新約聖書ギリシヤ語の文法書であるメイチェンには「英語の用法と異なっている点は、ギリシヤ語の間接話法においては、間接話法の背後にある直接話法における同じ法 (mood) と時制 (tense) が保留されることである。」とある。（『新約聖書ギリシヤ語原典入門』新生運動協力会発行、一六六頁セクシヨン三〇八）。同様に、Porter, *Idioms* pp. 268-9; McKay, *A New Syntax* pp. 101-4.
- ⑮ この *modus* の時制の意味については、Porter, *Idioms* pp. 189-90.
- ⑯ つまり未来の助動詞の過去時制。
- ⑰ 動詞 *αἰτιῶμαι* は新約聖書全体で一〇八回用いられているが、そのうちアオリスト時制は八九回、未来時制が一六回、現在時制が三回である。イエスの復活の意味で使用されているのは、アオリスト時制で一五回、未来時制で三回のみである。それぞれ列挙すると、アオリスト時制の用例は、マルコによる福音書八章三

一節、九章九節、一六章九節（もともとのマルコの本文であったとは思われない）、ルカによる福音書二四章七節、四六節、ヨハネによる福音書二〇章九節、使徒の働き二章二四節、三三節、三章二六節、一〇章四一節、一三章三一節、三四節、一七章三節、三一節、第一テサロニケ四章一四節。未来時制の用例はマルコによる福音書九章三一節、一〇章三四節、ルカによる福音書一八章三三節。

⑱ マタイによる福音書一六章二二節、一七章九節、二六章三二節、二七章六四節、二八章六節、七節、マルコによる福音書一四章二八節、一六章六節、ルカによる福音書九章二二節、二四章六節、三四節、ヨハネによる福音書二章二二節、二二章一四節、使徒の働き三章一五節、四章一〇節、五章三〇節、一〇章四〇節、一三章三〇節、三七節、ローマ人への手紙四章二四節、二五節、六章四節、九節、七章四節、八章一一節、三四節、一〇章九節、コリント人への手紙第一、六章一四節、一五章一五節、コリント人への手紙第二、四章一四節、五章一五節、ガラテヤ人への手紙一章一節、エペソ人への手紙一章二〇節、コロサイ人への手紙二章一二節、テサロニケ人への手紙第一、一章一〇節、ペテロの手紙第一、一章二一節。

⑲ マルコによる福音書一六章一四節（勿論、マルコ本来の本文でなかったであろう）、コリント人への手紙第一、一五章四節、一二節、一三節、一四節、一六節、一七節、二〇節、テモテへの手紙第二、二章八節。

⑳ マタイによる福音書一七章二三節、二〇章一九節。

㉑ マタイによる福音書二七章六三節。

㉒ マタイによる福音書二〇章一九節、二六章二節、二七章二三節、二三節、二六節、三二節、三五節、マルコによる福音書一五章一三節、一四節、一五節、二〇節、二五節、ルカによる福音書二三章二三節、三三節、二四章七節、二〇節、ヨハネによる福音書一九章六節（三回）、一〇節、一五節（二回）、一六節、一八節、二〇節、二三節、四一節、使徒の働き二章三六節、四章一〇節、コリント人への手紙第一、二章八

節、コリント人への手紙第二、一三章四節、黙示録一一章八節。

②③ マタイによる福音書二八章五節、マルコによる福音書一六章六節、コリントへの手紙第一、一章二三節、二章二節、ガラテヤ人への手紙三章一節。

②④ マルコによる福音書一五章二四節、ルカによる福音書三章二二節（二回）。

②⑤ 誰も、この完了時制の分詞を根拠にしてパウロはここで、イエス・キリストがまだ十字架にかかっていると考えていたと読まないであろう。むしろ、イエスの十字架の意義または効力（？）が今でも有効である、との意味と考えられる。

②⑥ 『基督神学』第七号掲載の拙稿「新約ギリシヤ語中級文法試（私）論（一）」参照のこと。

（新約学・教師）